

会報二月号 死生観

目次

- ・ 死が存在しなかったら
- ・ 死は生の一部
- ・ 人生は死の覚悟から始まる
- ・ 不完全性
- ・ 命の使い道
- ・ 死に狂い

● 死が存在しなかったら

人間は皆いずれ死ぬ。ならば、自殺だって構わないのだろうか。どうせ死ぬなら、結局すべて滅びていくのなら、何をしても無意味なのだろうか。

それを考えるために、逆に、絶対に死ななかったとしたら、不死ならどういうことになるかを考えてみたい。

もし死がないなら、その世界には時間という概念が失われていくだろう。その仕事を今日やるか、それとも百年後にやるかは大した問題ではなくなる。与えられた時間は無限にあるのだから、「いつやるの？いつかね」となってしまい、全てにおいて、今やる理由、集中してやる理由が無くなっていく。締め切りの無い仕事を想像してほしい。どうなるだろう。

人間は制約があるからこそ力を発揮できる。制約がなければ秩序も失われていく。制約や秩序が無ければ、人間は混沌・放縦に向かう。創意工夫も集中力も忍耐力も精神力も、制約の中でこそ鍛えられる。自分の持っている時間が有限だからこそ、可能性に制約があるからこそ、何かに挑戦したり、一つのことには時間を費やしたりすることに意味が生まれる。

● 死は生の一部

つまり、死とは、人間に「取り組め」と背中を押してくれるものなのである。死は生の一部であって、生とは切り離せないものである。死と生は命の側面であって、どちらかが別々に在るわけではないのである。必ず死ぬ＝必死、命懸けで取り組むことで、生きるための活路が見出される。死中に活有り。物事は逆説になっていることが

多いが、死生もその一つである。必死で取り組む以上に生が躍動するものはない。死は、生きる価値を生み出すものである。死は人生を無意味なものにするのではなく、意味あるものにする。

人生に重い意味を与えているものは、やったこともやらなかったこともすべて、「やり直しがきかない」ということである。それは人生が一度きりということであり、今日が一回きりであり、一瞬一瞬が一回きりであるということでもある。実現した時間は過去にしまわれ、実現されなかった時間は永遠に失われる。この意味で、過去こそが最も確かなものである。自分が死んでも消えないものは、人生において「取り組んできたこと」だけである。やってきたことや実現したことは、自分の死後も誰かに影響を与え続ける可能性がある。ヘミングウェイの「老人と海」の最後のシーンも然り。老人の志は他の漁師や少年に引き継がれただろう。

● 人生は死の覚悟から始まる

死が生の一部なら、生の後に訪れる死を軽視して生を語ることはできない。まず、どう死ぬかを定めることである。もし家族や友人に見守られて死にたいなら、家族や友人を大切に生きる生き方を選ぶだろう。死に方が決まれば、生き方が定まってくる。勿論、必ず決めた通りに死ぬことができるわけではない。不確定な要素は必ずあるからだ。しかし、死に方を決めることによって、生を定めることはできる。

● 不完全性

不確定な要素というものは、時間に限定されるものではない。人間の存在自体、不完全なものであるから不確定な要素は常にある。しかし、その不完全性（無限ではなく有限であること）にこそ意味があるのだ。死による人間の持ち時間の有限性（不完全性）の価値は、前述したように、生を研ぎ澄まして有意義なものと出来得ることである。

人間存在そのものの有限性（不完全性）とは何か。それは、人間はひとりでは生きられないということである。孤立しては命を全うすることは難しい。他者と一緒に生きるということは、現世での人生を意味あるものにすることができる。

同じ様に、人間の持つ様々な有限性（不完全性）は、人間を成長させる。有限性・不完全性こそが人間を成長させるのである。例えば、知性の有限性（不完全性）の価値とは、人間を謙虚にし、人智を超えた対象に敬虔になれることである。また、活動の有限性（不完全性）の価値は、かえって集中して全身全霊で取り組もうとすることができる点にある。

そしてまた、人間の不完全性の自覚こそが、自分や相手を赦す覚悟と寛容さ、思いやり、謙虚さ、そして勤勉さと挑戦、勇気を育む土台となるのである。

● 命の使い道

人間は不完全であると同時に、ひとりひとりはその独自性を持つ存在として全きものである（永久不慊と絶対自慊）。ひとりひとりがその独自性を鍛錬陶冶していくなれば、皆がかけがえのない存在になる。不完全とは、それぞれが個性的であり、独自の存在であり、変化の可能性を持っているということである。その独自性を以て、主体的・創造的に己の信念・理想・仁義・愛等の具現化を目指して社会に寄与していくならば（位育参贊）、ひとりひとりの生命は燃焼し、その魂は躍動する。「生命の燃焼・魂の躍動」、それこそが生命の本質であり目的である。

人生からの問いに対して、自らの命をいかに燃焼させるか。それは、自分の命を何に捧げているかである。

自身の幸福とは、自己以外の「何ものか（愛する人、事業、学問、思想哲学等）」の為に、自分自身を捧げ尽くすことの中にある。崇高な目標に向かって、必死・命懸けの体当たりで生きていく姿勢の中にある。

● 死に狂い

「葉隠」や「易経」をはじめとする沢山の古典に親しむことで、偉大な先人の魂に触れることができる。人類とはどんな尊厳を持った存在か、どんな文化や思想や歴史を持った存在か、そして、人類は何を畏怖し、どんな崇高なものを目指して生きてきたかを会得することができる。それは人類の初心（原点）と理想（頂点）を知ることでもある。そして古典は、ひとりひとりが自らの魂を磨く方法論とも言える。

後は自らの運命を丸ごと愛し、ただひとりだけで生きてただひとりだけで死ぬという「孤独」を覚悟し、自己以外の何ものかに対して己の命を捧げ尽くすだけである。死に狂いの体当たりを繰り返すだけである。

今月も健康と健闘を。